

第40号

〒542-0072 大阪市中央区高津 2-8-10 末広ビル 502 号室
Tel(06)6214-0753 Fax(06)6214-0755



重要無形文化財保持者
一般社団法人関西常磐津協会理事長

常磐津 一巴太夫

あけましてお目出度うございます。
皆様よき午歳の新春をお迎えのことと
心よりお慶び申し上げます。

当協会も昨年四月一日より一般社団法人となり、心機一転、新しい理事会となり業務を推進することになりました。協会員一同におかれましても、今年もよろしくお願ひ申し上げます。

さて、昨年一年間の行事は二月二十四日(日) 国立文楽劇場小ホールにおきまして、第十七回「ときわぎ演奏会」を行い、教室会員の五段とわたしの社中二段の方々が出演され、盛況裡に終了いたしました。その後、大阪日航ホテルにて親睦会をいたしました。

四月四日(木)は江口君堂に於て常磐津塚の法要を行いました。昨年は常磐津錦司様の二十七回忌と、常磐津小欣司様の二十三回忌に当たりましたので、お勤めをしていただき、お二方を偲んでおられました。

六月八日(土)大阪中央会館二階第三会議室に於て一般社団法人の第二回社員総会を開きました。

八月四日(日)国立文楽劇場小ホールに於きまして、第七十四回の常磐津節公演



会を開きました。美佐季様、三都貴様他の「廓の仇夢(権八)」、三希由紀様・三都姫様他の「細石巖鶴亀」と男性正会員ほぼ全員による「神路山色瑋(油屋)」上・中・下を三段に分けて演奏いたしました。ときどき願ひをいたしております落語家の桂九雀様に司会・解説をお願いいたしました。九雀様は今回特に台本を何回となくお読みいただき、わかりやすく、面白く解説をしていただきました。通し狂言の「油屋」を選びましたので義太夫節の「伊勢音頭」との違いもよくわかった様でございます。開演当初より千種楽まで大勢のお客様がおこし下さり、満員で協会員全員非常に有難く思っております。

今年も当協会を御後援下さることをお願いいたします、新年の御挨拶といたします。

第十八回

ときわぎ

日時 平成26年2月23日(日)
午後12時30分開場
午後1時開演

場所 国立文楽劇場小ホール
入場料 ￥3000

御祝儀
鶴亀 太夫・三味線

教室 三保の松 浄瑠璃 目根まち子

松の羽衣 三味線 日根ゆづる

松の名所 浄瑠璃 田口方子

うつぼ 浄瑠璃 岡島千賀子
田中千鶴子
田口方子

戻橋 美佐季社中
浄瑠璃 向平美希

釣女 小欣矢社中
浄瑠璃 菊野齋敏
東村信江こと
小添 三味線 恒川美咲子
曾我一美 伊賀上文子
平田都

紅葉狩 一巴太夫社中
浄瑠璃 若柳於琴こと
琴巴

紅葉狩

「油屋」における 歌舞伎、文楽と常磐津の相違点

常磐津綱男

当協会公演会に於きまして昨年八月、「油屋」の全曲を演奏致しました。歌舞伎、義太夫は伊勢音頭恋寝刃（いせおんどこいのねたば）との演目名、常磐津では神路山色瑛（かみじやまうきなのこいぐち）との本名題。江戸時代に伊勢古市の油屋で実際に興った事件を描いておりますが脚本、演出等が少し異なっております。今回はその相違点を検証してみたいと思います。

一七九六年（寛政八年）五月伊勢古市の遊廓で興った実話を元に歌舞伎ではその年の七月に大阪の道頓堀の芝居で上演され評判になったそうです。映画、テレビのない時代、お芝居は大眾にとつて遠い土地で興った事件を知る現在のワイドショーの様な役割で庶民を震撼、熱狂させた娯楽だったのでしょう。歌舞伎ではこのお芝居の目玉となつている油屋店先の場、奥庭の場以外、事件の発端を説明している序幕が有りますが文楽、常磐津では油屋の段から物語が始まつて居ります。文楽では曲の最初にオクリと言つて「こそはたち帰る」という所から始まります、女流義太夫三味線弾きの鶴澤津賀寿さんにお聞きしたのですがその前は現在残つて居ないと言う事でした。歌舞伎の評判を受けて文楽で上演されたのが一八三八年（天保九年）ですが、きつとその当時には曲はあつたのではと推

測致します。そして文楽から十七年後、一八五五年（安政二年）に常磐津は発表されました。

一、歌舞伎、文楽に無く 常磐津に有るもの

前述の通り歌舞伎から文楽にも書き写されたと言ふ訳ですが常磐津はその文楽の形を踏襲しております。文楽同様油屋に至るまでの場面はありません、しかし常磐津にはその油屋に入つてから歌舞伎、文楽にない場面があります。

(ア) 常磐津の油屋の冒頭「派手な遊びは：」から始まる酒宴は歌舞伎、文楽には無い場面です、岩治、北六や其の取り巻きの治郎助、丈八、油屋仲間万野や油屋女中、江戸からの幫間殿中、破扇、等々が酒を飲み其の肴に幫間たちの芸が披露される場面があります、そして一騒ぎあつて皆々座敷を替える、そしてお紺の登場となります。

(イ) 万野、北六、治郎助の三人が貢の持つ青江下坂を奪おうと算段する場面が常磐津にはありません、我々は「見立て」と言つておりますが奥座敷から流れてくる三味線に乗つての台詞の遣り取りがあります。この場面も歌舞伎、文楽には有りません。歌舞伎、文楽では貢が刀を喜助に預け部屋を去ると岩治が出てきて刀の中身を替え「此れで良し」とかの台詞を言わせ其れを喜助が陰から見ている、と言う簡単な視覚的場面です。

(ウ) 常磐津では岩治が刀の中身を入れ替える場面を端唄の「柵のたるま

さん」を岩治が唄いながらやっていると言ふ視覚的より音楽的に現しております。

(エ) お鹿の登場ですが文楽ではあつさりとお鹿の恨み節の様な台詞だけで終わつています、歌舞伎ではお鹿が万野を呼び偽筆の言いがかりを解かせております、万野、貢、お鹿の三人の遣り取りが面白い場面となつております。常磐津では貢が発した「お猿芝居のお染とは」と言う言葉から一転、「近頃河原の達引」堀川の場の猿回しのくだりに飛躍してしましますが聴き所となつております。此れも又視覚的より音楽的に楽しんで貰おうとの意図が感じられます。常磐津の定本では安政二年（一八五五）五月市村座で上演されたと書いておりますが私にはこの様に音楽的要素が多いと言う観点から素浄瑠璃として書かれたのではと言う想像が消えません。

二、油屋十人斬りの場面

(ア) 貢が青江下坂で次々登場人物を惨殺していく場面、常磐津では油屋十人斬りと称しますが歌舞伎では油屋奥庭の場、文楽では油屋奥庭の段と言います。歌舞伎では先ず万野が殺されお鹿が殺されます、此処で舞台が回り奥庭の場となります、此処で貢、岩治、北六（丈八）の三人の歌舞伎独特のスローモーションな立ち回りがあります。花道へも行き顔に血糊が付くと言つた演出が有つたり見得が有つたりで北六と岩治が殺されます。十人斬りと言つていますが常磐津では十人も殺

されておられません、万野の次は北六が登場、そしてお鹿となります、其の後丈八が出てきて殺されます。これ等の場面ですがバックに流れるのは音頭です。音頭と言つても「伊勢はナア津で持つ」の「伊勢音頭」でなく長唄鏡獅子の中にある「人の心の花の露」の川崎音頭（河崎音頭）です。

余談ですがこの音頭は三世相錦繡文章の長庵殺しの場面にも出てきます。両曲とも四世岸澤古式部による作曲ですが、油屋の二年後に三世相が発表されました。と言う事から私の想像ですが、作曲としては良く有る手法で同じ殺しの場面なので同じ音頭を使い手間を省いたと言うか柳の下に二匹目のドジョウを見つけたと言うか、上手く構成したと思います。歌舞伎では北六と岩治の二人対貢と言う構図になつておりますが常磐津では岩治対貢になつております。そして此れまでバック音楽が音頭なのに対して一転この場面のみ「八千代獅子」に合わせ台詞を言い立ち回りをしている様子が描かれて居ります。これも音楽的变化をねらつた作曲だと思います。因みに歌舞伎では最後の幕が引かれる時ぎざみの柀に被せ下座音楽が「八千代獅子」を奏で幕を閉じます。文楽は万野が殺されると岩治と北六とお鹿が登場しますが岩治は難を遁れ一旦奥庭に逃げ北六とお鹿の二人が殺されます、次に物音に気が付きて来た、起き番男（夜回り）、仲居、下女の三人が惨殺されます。次は寝とぼけた小女郎が出てきて又殺されま

た泊り客が殺され其の客を探しに出てきた相方の女郎も殺されます。此処でお紺が登場、折紙を見せ誤解を解きま

す、又喜助も登場し刀、折紙が揃い万次郎へ報告と出る所に岩治が再登場します、そして「恨みの刀受け取れ」の言葉と共に殺されます、計算して頂くと分かりますが文楽こそが十人斬りなのです。又文楽では個々の惨殺の様子を細かく描いております、例えば小女郎の場合「・・・片足ちようと切り離せば、片足立ちにひい、ふう、みい、よろ／＼」と手水鉢に取り付いて、其の俣息は絶え果てし、無残と言うも余りあり」と語っております他も一人一人の惨殺シーンを細かく描いております。

(イ) 段切れですが常磐津、歌舞伎とも貢、お紺、喜助の三人が揃い大団円という形で終わっています。文楽の場合前述の十人斬りの後、貢が「青江下坂」と「折紙」を持って万次郎宅へ急ぎ行く、と未だ話は繋がっていると言いう形で終わっております。歌舞伎でも現在奥庭の場のは上演されませんが第三幕大詰めとして続きが有る事は此の文楽の段切れで想像出来ます。いくらかお芝居と言っても多くの人を殺め、文楽に至っては罪の無い人まで殺され其れで目度し／＼では話が分かりません。やはり事件の顛末、お家騒動の首謀者が判明しお白洲で裁かれ、貢も何らかのお裁きがあり罪を償うため流刑にされる、其れをお紺が待っている。又は忠義の為の行動と言って恩赦になり「アア有難や忝なや」とか言っ

て幕になると言うのが私の想像する物語の結末です。此の油屋の後の場面はたぶんその様な形であつたのではないかと思います。ただ話がくどく余り面白くなかつたのでしよう、お芝居では良くある事です。

二、万野の描き方

(ア) 常磐津では万野を酒宴の段のその長台詞で「・・・これでも元は江戸に居て、花の盛りは吉原の・・・」とある様に江戸吉原から伊勢古市に流れて来た江戸者と設定して居ります。歌舞伎では万野の出所が如何の、又どのような背景があつたとか描いておりません、単に仲居の万野とだけの事ですが、歌舞伎では万野以外にその時の一座の役者の都合により千野とか葛野と名を付け仲居として出しております。文楽でもやはり万野の出所を説明している箇所は有りませんがやはり義太夫狂言なので上方者のような感じがします、ただ万野、お鹿の台詞に頻繁に出てくる「コレシコレ」と言う言葉がもし伊勢地方の方言なら万野は土地の間として描いているかも知れません。この「コレシコレ」と言う言葉をご存知の方が居られたら教えていただきたいと思ひます。

(イ) 史実ではお紺や油屋の店の者が数人殺傷された訳ですが其の話を お紺と貢の愛情物語とお家騒動、又本来その他大勢の存在である仲居さんを物語の重要な役にしたとは本当に当時の作者の想像力、創造力に驚嘆します。この油屋の段は、此の万野の出来によ

り歌舞伎、文楽、常磐津いずれもその作品の良し悪しの評価が問われます、油屋は主人公福岡貢の芝居と言うよりも万野の芝居と言つても過言では無いと思ひます。斯く言う私ももし油屋でどの役を演りたいかと問われれば即座に「万野」と答えたいと思ひます。昭和五十四年三月二十日、北浜の美術倶楽部で油屋が陰離子入りで演奏されました。先代家元の貢、現家元のお紺、浪花太夫さんの岩治、文規太夫さんの北六と喜助、八重太夫さんのお鹿、文磐太夫さんの幫間、三味線を政寿郎さん、文右衛門さん、東蔵さん、上調子を小常さん、そして万野は我が師匠綱太夫でした。イヤア良い油屋でした、今も時々その時のテープを聴きます。

三、歌舞伎、文楽にあつて 常磐津に無いもの

(ア) 油屋と言えれば夏芝居、舞台には夏を感じさせられる物が満載しております。例えば衣装、貢が着ているのは白緋の越後上布に黒縮緬の羽織、博多帯、万野は黒の明石縮み、お紺は紫、お鹿はひわ色の緞の着物、喜助は小弁慶格子の一重の着物、岩治や北六はお揃いの貸浴衣と夏の着物が網羅されております。そして皆が持つ団扇が揺らいでいるのが夏の雰囲気を感じさせております。残念ながら常磐津の記載にはこの様な事は書いておりません、一番遅く書上げられた常磐津は歌舞伎、文楽の視覚的要素を頂き「油屋」の演奏において聴衆の皆様にその姿を思い浮かべて頂いております。

(イ) お紺は岩治が持っている「折紙」を取り戻すため岩治に靡いた様に見せかけますが歌舞伎、文楽では此の場面をハッキリと次の様に描いておりません。岩治の懐にある袱紗包みを余所の女からの手紙では無いかとか怪気したような事を言うかと岩治はお紺の疑いを晴らすため「折紙」の入っている袱紗を渡して仕舞います。常磐津ではその場面は有りません、貢が喜助から刀を受け取り油屋を出ると「後は座敷も浮き立つて・・・打ち連れてこそ」となり十人斬りの場面に移ります。

前述の通り文楽の形を踏襲して作った常磐津ですが何故此の場面を省いたのでしょうか。歌舞伎では油屋の幕でお紺が登場してきても最初はただうつむいて万野と貢、お鹿の遣り取りを聞いていただけです。動きと言えば団扇を煽いでいるだけです、お紺を演じる役者の為にもお紺の芝居の見せ場を作らなければ成らなかつたのでしよう。

文楽は其の形を踏襲して其の場面を残しております。常磐津は酒宴が終わるお紺が登場しますと此れまでの事の経緯、自分の立場、身を岩治に任せ「折紙」取り戻そうと言つて覚悟の台詞を言つて居るのでお紺の演じ場所は結構有ります。お紺の決意は台詞で分かるのですが何時岩治から「折紙」を取り戻したのか分かりませんが、十人斬りの最後に「その折紙は手に入りました」と言つて急に出てきます。作者瀬川如臈は「お紺が岩治から「折紙」を奪い返す場面は皆さん想像して下さい」と言う事なのでしようか。

四、まとめ

式年遷宮と言う年に伊勢を舞台にした「油屋」と言う演目を演奏させて頂き、又協会広報部と言う立場から個人的には三度目の古市への探訪となり改めて「油屋」と言う曲を考察させて頂き、普段考えなかった事が色々と分かって来ました。

常磐津の「油屋」が発表された一八五五年(安政二年)は正に幕末、ペリーが黒船で遣つて来たのが一八五三年(嘉永六年)ですから政治の世界では風雲急を告げ、大政奉還へ真つしぐらへの流れの時代に突入した時期でした、しかし情報伝達の手段が現代と違うので庶民の間では時間は未だゆったりと流れていたのでしょう、庶民の生活は相変わらず「お伊勢参り」が有り、帰りは古市で精進落しをし、芝居を見て遠い土地の出来事を震撼し熱狂していたと思います。



伊勢古市への探訪と「油屋」初演の謎

常磐津若音太夫

昨年の猛暑の中、常磐津節「油屋」(神路山色瑛)の舞台である伊勢古市を、広報部の企画により探訪しました。当日の様子と、「油屋」初演にまつわる謎の検討について報告いたします。

*取材日 平成25年7月28日(日)

*参加者 正会員5名、外部参加3名。

一、式年遷宮(お白石持)木遣り唄

いま古市を訪ねても、往時の花街としての繁栄は想像できません。油屋・備前をはじめ数十軒の遊廓は跡形なく、数本の細長い石碑にその名を刻むのみ。料理屋・旅籠の遺構を唯一伝える麻吉旅館、大林寺に守られるお紺と齋の比翼塚など、生き証人はごく僅かです。それらの委細や常磐津節「油屋」との関係については、常磐津小清師が本誌7号(H8年9月)で執筆されていらつしやるので、ぜひご参照ください。

今回、式年遷宮に際し、(お白石持)に出くわす幸運に恵まれました。(お白石持)は、(お木曳)と同様、神領民のご奉仕により支えられる行事の一つです。内宮・外宮の正殿に敷く白石をお運びするため、地元各町の奉獻団が活躍します(前々回の遷宮から、地元以外のかたも特別神領民として参加されています)。

白石は神様の布団ともいわれ、一般

の人々は立ち入れない正殿内に敷かれます。宮川から石を拾い集め、洗い清め、運んで奉納するという榮譽と骨折りを伴います。とくに、古市を経由し巡行する(陸曳)は難儀だと思われます。古市近辺は「相の山」とも呼ばれるように、内宮と外宮の中間に位置する小高い地域で、起伏に富むからです。なぜ、ここをわざわざ経由するのでしようか。

交通や参詣ルートが多様化した現在では実感しにくいのですが、地図を見ると、古市は、内宮と外宮を結ぶ動線のほぼ中央にあります。参道の中心地として参詣者を集めるには便利ですが、山あい芝居や花街は不向きなように思えます。しかし、新吉原や猿若町と同様、周囲から隔離した土地は、格好の適地だったと考えられます。

伊勢詣の「ウラ舞台」筆頭としての古市。ここを(陸曳)が巡行しなければ、収まりがつかなかったのでしょうか。裕福な遊郭や茶屋などからの御祝儀や御振舞も、大いに期待できたのかもしれない。

さて、二つめの幸運は、各奉獻団による(木遣り唄)に出会えたことです。長い道中に多くの団が連なる(お白石持)は、間隔調整や休息を確保しながら時間をかけ移動します。進行を再開する際や長い停止中に、(木遣り唄)が披露されます。「石」ですが「木」遣り唄です。

「ソーリヤートコセー、ヨーイヤナ、アーレワイセー、コレワイセー…」このような囃子ことばが特徴です。唄

には複数の種類があり、民謡風の朗々とした素朴な曲調のものがメインでしたが、私たちが(伊勢音頭)として三味線音楽の中で親しんでいる曲調のものも聴き取れました。

取材当日の団には、伊勢音頭(河崎音頭とも)の発祥とされる河崎地域の方々も参加されていましたので、まさに伊勢音頭の源流に巡り会えたような、驚きと喜びを感じました。

蒸し暑さと疲労のため、仮設の医務所に運び込まれる人もちらほら。(お白石持)に関わる神領民の皆さんの熱意に圧倒されました。かつて古市の繁栄を支えた人々の心意気は、古市が芝居町・花街としての機能と町並みを失った現在でも、往時とかわることなく、この地域に息づいているように感じました。



二、資料館で「お鹿」に出会う

〈お白石持〉〈木遣り唄〉の喧噪の中に、いにしえの古市の賑わいを空想しながら、道筋に建つ小さな資料館、伊勢市立伊勢古市参宮街道資料館を訪ねました。備前屋等の遊郭が土産物として作った絵入りの刷り物、芝居小屋の写真、伊勢歌舞伎の興行番付など、貴重なものが多数展示されていました。

なかでも、「古市最後の芸妓さん」と記された一枚の古い写真に、我々の目は釘付けに。常磐津や歌舞伎の「油屋」でお馴染みの「お鹿」のイメージにあまりにもびつたりだったからです。皆、失笑が止みませんでした。

歌舞伎「油屋」を演じる戦前の役者の写真（おそらく演劇雑誌から転載したもの）もたくさん飾られ、来たる公演会での「油屋」の稽古中だった我々にとっては、このような資料が醸し出す古市や芝居の「空気」に触れたことも収穫となりました。

三、常磐津節「油屋」初演の再検討

常磐津節「油屋」（神路山色瑛）が世に現れたのは、安政二年（一八五五）五月市村座とされていますが、いくつかの謎が残されています。探訪取材とともに、この謎について考えてみました。

謎の第一は、歌舞伎の「油屋」では、昔も今も「浄瑠璃」を一切使用しないことです。歌舞伎の義太夫三味線方の鶴澤慎治さんにお伺いしたところ、歌舞伎の竹本（義太夫節）を用いる事例

はないだろうと仰っていました。

また、現在私は、歌舞伎の興行番付中の常磐津曲目や演奏者名の調査を進めています。「関の扉」「将門」のように常磐津地の舞踊劇として「油屋」を上演した事例は、確認できていません。つまり、歌舞伎の「油屋」は、義太夫狂言や舞踊劇ではなく、純粋なセリフ劇として作られ上演されてきた芝居であると考えられます。

謎の二つめは、初演とされる市村座の興行番付にあります。番付をみると、「伊勢音頭恋寝刃」（油屋）の名題・配役・挿絵等がありますが、常磐津が使用された根拠となる常磐津連名が見当たらないのです。この時期の江戸三座の興行番付において、豊後系浄瑠璃の出動連中を書き漏らすことは、出動連中の中心である各家元のメンツが非常に重んじられた時代ですから、あり得ないと考えられます。なお、同興行の大切所作事「三幅対戯場彩色」に常磐津豊後大掾連中が出勤していますが、大切に油屋とは無関係の内容です。

そこで、この謎を解く鍵を求めて、安政二年初演説を最初に唱えた人は誰なのか、調べ直してみました。今のところ、昭和二年（一九二七）に刊行された歌詞集『日本音曲全集 第八巻 常磐津全集』に記された解説が最古のようです。この本の編者は、中内蝶二と田村西男、当時一流の文学者です。二人とも新作歌舞伎の台本や常磐津の作詞も手がけ、常磐津家元・松尾太夫・文字兵衛らとも交流していたとみられます。例えば中内は、昭和九年に家元

主催の二世豊後大掾追善会で新曲「松色増常磐敷島」を作詞するなど、常磐津家元と深いつながりがあったようです。このような交流をふまえ、中内・田村による安政二年初演説が、家元監修『定本常磐津全集』に引用されたのかもかもしれません。

ところで、中内・田村による解説文には、次のように記されています。「従来の竹本の浄瑠璃では面白くないので、目先を変えて常磐津豊後大掾、岸沢古式部一派で常磐津に直して出した」。

前述した二つの謎の要因が、そっくりそのまま含まれています。まず、歌舞伎の油屋を「従来の竹本では」と認識しているのは、別の演目と混同するなどした誤解であると思われる。また、もしこの著者が歌舞伎の紋番付（役割番付）を閲覧しているとしたら、大切所作の名題と「油屋」の名題が近い位置に版刻されているので、常磐津地の名題を取り違えて読み取った可能性があるかもしれません。しかし、同じ興行の辻番付と絵本番付を閲覧すると、それは誤解であることが判明します。

では、常磐津「油屋」（神路山色瑛）は、いつ作られたのでしょうか。岸沢派が分派独立した幕末から明治初期にかけて、岸沢派は、多数の素浄瑠璃の稽古本を独自に出版しました（竹内有一「分離期岸沢派の語りもの」平成八年）。その時期に「油屋」の稽古本も出版されています。多くのお師匠方が家蔵される「油屋」稽古本は、この岸沢の版

木が坂川屋に引き取られた後、内題下に常磐津家元名義を追加して摺られたものです。その巻末に「文久二壬戌年初秋吉辰」とありますので、素直に文久二年（一八六二）を開曲年としておくのがよいと思われます。

その初版本の内題下には「岸沢古式部直伝・作者瀬川如臈述」とありますので、作曲・作詞者については通説通りです。また、わずか七年の違いですから、歴史的な位置づけ、楽曲解釈等について、大きな影響を及ぼすこともないでしょう。

ともかく、常磐津の「油屋」は、歌舞伎の地として作られた曲ではなく、歌舞伎で上演された機会もないといつてよいと思われます。その稽古本出版の経緯によれば、常磐津と岸沢が分離した時期に岸沢のほうで作られ曲であると考えられますが、昭和四年に名人会「帝劇バラエチー」で七世文字太夫が語るなど、常磐津家元らの尽力によっても、その魅力が育まれてきました。常磐津と岸沢が距離を置いた時期があったために、開曲に関する情報が錯綜してしまつたとも想像されますが、両派が分離したために互いに切磋琢磨する意識を高め、常磐津全体を盛り立ててきたともいえましよう。

協会だより

行事報告

芸団協 関西協議会
芸能サロン
新しい時代の息吹を求め
かみがたの歳時記
平成25年7月20日(土)
吹田市メイシアター
中ホール
午後2時開演
吹田市で開催された芸能サロン、今回当協会からは美佐季師・半中師の両立てで、長唄協会関西支部様との掛合、角兵衛を演奏しました。珍しい掛合での角兵衛に、各方面から好評を頂きました。



行事予定

第18回ときわぎ
平成26年2月23日(日)
大阪・国立文楽劇場ホール
入場料3000円
常磐津塚法要
平成26年4月4日(金)
江口の君堂寂光寺 正午読経
第二回定時社員総会
平成26年5月6日頃予定

個人報告

第75回 常磐津節公演会
平成26年11月15日(土)
大阪・国立文楽劇場小ホール
追手門学院大学・常磐津一巴太夫講演
平成25年7月1日(月)
大阪・追手門学院大学
第9回江戸音曲の世界
「戻橋」学生・一般200名以上が熱心に受講されました。

名曲で知る邦楽の世界
平成25年7月20日(土)
東京・国立小劇場 午後2時開演
「乗合船恵方万歳」
出演 巴瑠幸太夫・小欣矢他

常磐津綱男ゆかた会
平成25年9月1日(日)
名古屋・短歌会館 午後1時開演
常磐津綱男作曲の「光源氏は水水を食べたか」など全9曲が演奏されました。

常磐津小文太夫改め
十二代目常磐津小文字太夫
襲名披露演奏会
平成25年10月21日(月)
東京・国立小劇場 午前11時開演

古典の日
常磐津一巴太夫出演
平成25年11月1日(金)
名古屋・能楽堂
古典の日 邦楽名古屋舞台
常磐津一巴太夫作曲「睦月連理戀」
出演 一巴太夫・都岳蔵他



解説の南山大学教授・安田文吉氏と

第二回 小欣矢の会
平成25年12月21日(土)
大阪本町・テイジンホール
午前10時開演

小欣矢理事が「第二回小欣矢の会」を開催されました。松山の「社中初め、一巴太夫理事長・小由太夫常務理事・欣勢太夫師、各「社中」からの出演並びに、山村若ご宗家初め舞踊家様方のご出演もあり、大変な盛会となりました。



稀曲の会
平成25年12月21日(土)
東京・国立劇場

東京国立劇場より「稀曲の会」の依頼がありました。父、文之助が大正の大震災の折、東京の家より持ち出せた、忠臣蔵八段目下「本蔵下屋敷」を稀曲として提供、出演いたしました。(都岳蔵)

個人予定

第七回常磐津綱男勉強会
平成26年2月2日(日)
名古屋・今池ガスホール
入場料2000円
午後1時開演・午後1時半開演
演目 乗合船恵方万歳 他4曲
舞踊 松の羽衣 他2曲

国立文楽劇場開場30周年記念
平成26年5月10日(土)

新進と花形による舞踊・邦楽鑑賞会。
「お夏狂乱」出演 巴瑠幸太夫・小欣矢他

たばね会20周年記念会
平成26年6月8日(日)

京都宮川町歌舞練場
都代太夫さんとお母さまの合同の会です。

編集後記

今号は昨年公演会で演奏された「油屋」にちなんで訪れた伊勢・古市について掲載しています。真夏の伊勢は本当に暑く、また残念ながら昔の街並を感じる事は出来ませんでした。が、ちょうど式年遷宮の年にあたり「お白石持ち」の行事に出会い、地元の方々の木遣りを聴くことが出来ました。次回は「関の扉」にちなんで墨染寺を訪ねます。皆さんも御一緒にいかがですか？(麒)

広報部と一緒に名曲の舞台を訪ねよう!



その2 墨染寺・逢坂関

常磐津・歌舞伎でお馴染みの名作「関の扉」にちなんで寺社・史蹟を取材いたします(次号にレポートを掲載予定)。ぜひご同行ください。どなたでもご参加いただけます。

日時 平成26年4月6日(日) 集合 10:45
集合場所 京阪本線「墨染」駅、1番線切符売場
参加費用 交通費・昼食代(いずれも実費のみ)

行程 墨染駅 ▶ 墨染寺 ▶ 欣浄寺・深草少将の通い道 ▶

墨染駅(京阪電車で移動、京阪三条乗換)京阪京津線 上柴町駅 ▶ 12:20頃 関蟬丸神社 下社 ▶ 関蟬丸神社 上社 ▶ 蟬丸神社 ▶ 13:30頃 昼食「かねよ」(きんし井・上縹まむし等、2,200円〜) 解散(京阪京津線 大谷駅まで徒歩2分)

申し込み 常磐津若音太夫 電話: 070-5019-1183 メール: wakaned@dj.pdx.ne.jp
お問合せ 常磐津三之祐 電話: 090-7881-3717